

## 平成時代の趣味週間切手

永吉 秀夫

郵趣3月号掲載のように、4月に開催されるスタンプショウで、企画展示作品を依頼されています。ただしタイトルが少し間違っていて、正しくは平成年代もカバーしています。その平成年代から2リーフをここに紹介しておきます。

最近の趣味週間切手は年ごとに題材や形態がバラバラ、という印象がありますが、平成の前半までは昭和時代と同じく、数年ごとにまとまったテーマと形態で発行されています。下の5年間は、近代絵画を題材とした小型切手の時代です。

切手趣味週間

第6期(一覧)

### 平成時代の趣味週間切手

平成時代の大部分を占める1992~2019年については、使用済切手による一覧を柱にしたカタログコレクションの形で構成した。若干のシートバラエティを含めた。

#### 第6期(1992-96) 小型1種発行の時代

1992年以降は、静物を描いた近代絵画より取材した非連刷の1種発行となった。1996年までの5年間は、サイズが1つ前の連刷時代のままであったので、趣味週間切手の歴史上最も地味な時代となった。

1992年

1992. 4. 20

山口蓬春《榻上の花》



1993年

1993. 4. 20

堅山南風《画室にて》



1994年

1994. 4. 20

福田八郎《花菖蒲》



1995年

1995. 4. 20

金島桂華《画室の客》



1996年

1996. 4. 19

安田靉彦《窓》



この年に発生した阪神淡路大震災を受け、急遽義援金20円つきで発行された。

作品は、適切な消印のついた使用済切手による一覧を柱にして、若干の製造面バラエティを加えました。同じ年の切手にバラエティがあるわけではありませんが、例えば下のリーフのように、同時期の同サイズ・同版式の切手でも耳紙上の目打穴の配列が違っていたりして楽しめます。平成中期以降は、連刷様式や特殊印刷のパターンの変遷も楽しめます。

イベントの性格を考えると「全種の一覧」は未使用でもとも考えましたが、切手屋さんを一店訪れるだけで揃ってしまうようなものではつまらないので、こだわった使用済切手を使いました。

平成時代(1992-2019年)についてはご覧の2リーフのように、「使用済による一覧+アルファ」の形で16リーフの中に詰め込みましたが、昭和時代の分については製造面分類を掘り下げたほか、多様なカバー類による使用面表現も含めて、伝統郵趣コレクションとしての体裁を整えてあります。

## 切手趣味週間

第7期

### 目打型式の微妙な変化

1997年 《醍醐》

全型目打  
(非貫通、左右耳紙に2穴、上下0穴)

この年からサイズが再び大型(目打穴中心33×45ミリ)となったが、全型目打の飛び出し穴の数は従来通り「左右2穴、上下0穴」が維持された。



1998年 《罌粟》

全型目打  
(非貫通、左右耳紙に1穴、上下中央部のみ1穴)

切手サイズ・シートサイズは前年と同じであるが、飛び出し穴の数に変更された。

以後一部の年を除いて、このパターンが維持されている。

